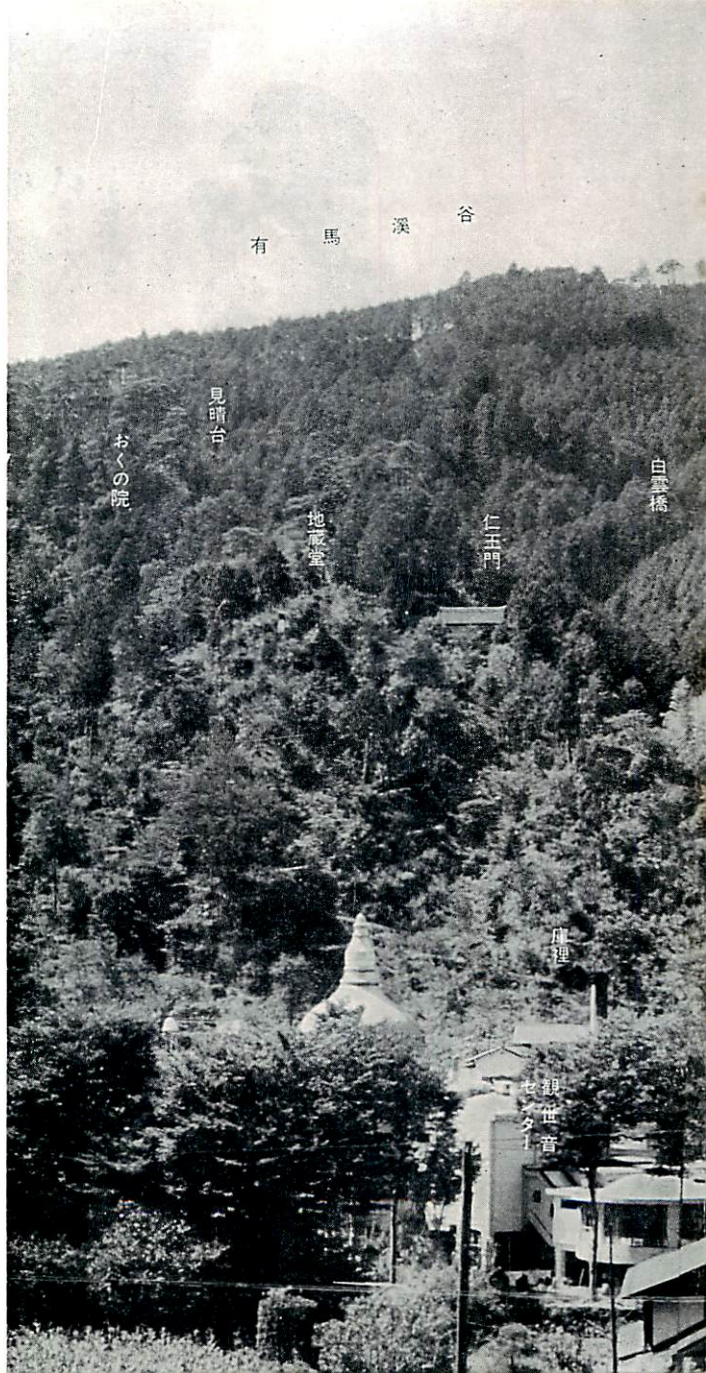


# 白雲山 鳥居觀音のしおり 9

昭和四十四年一月一日発行



気はたぎ  
心とまろく  
腹をこす  
いとをへく  
おのれ小まこ



## 新年御芽出とう存じます

「鳥居観音のしおり」も二カ年の春秋と、毎回二万部の発行が出来る迄に育ちました事は、愛読者皆様のお蔭と存じ謹んで御礼申し上げます。

私は文章に弱いのでただ単語をならべているだけです。又編集も初めてなので、さぞお読みにくいことと恐縮しております。

この画は、羊羹ようかんで日本一の虎屋の黒川社長が昔参議院議員の時に画いて居られるのを思い出し、宝船なので新年号にはふさわしいと思ひ御書き願ったものです。

黒川先生は、この画を身をもって実行しておられる立派な商人にふさわしい、実に腰のひくい方です。

# アラブ・地中海沿岸の旅路

(其ノ四)

桐江

## ローマ（イタリア）

九月二十七日、ローマの見物をしました。

イタリアの歴史の古い事は、ギリシヤによく似た処があり、古跡も非常に多く、見たい所は沢山ありますが、わずか三日の滞在なのでローマを見物しただけでした。

映画で名高いローマ終着駅は、ホテルに近かったので、昼夜二回見物しました。超近代的で、雄大な駅の構内には色々の売店がありまして、時間つぶしの呑気そうな人や、若い男女の目をばからぬ明るい抱擁や、各国からのおぼりさんの風俗等、東京駅や、新宿駅の様人間がごったがえしているのとは大違いで、ゆつたりとした駅でした。ところが駅の間近にくずれた城壁や、古色蒼然たる大寺院が大切に保存されているあたり、全く対照的で、さすがに観光に重点をおいているローマだと感心しました。

又ローマは噴水の町と云われ、立派な彫刻芸術で飾られた大噴水が、町の至る所にあつて、有名なトレビ

の噴水では  
うしろ向き

にお金を投げ込むと、

又ここに来

る事が出来

ると云う云

い伝えて、

大勢の人々

が盛んに、

うしろ向きで投げ込んで

おり、池の底には世界

各国の銀貨が沢山光

っていました。其他ト

リトーネの噴水、モー

ゼの噴水、蜂の噴水、

川の噴水等々六百もあ

るそうです。  
又建物の屋上や、商



泉のトレビー



バチカン セントピーター寺院

## バチカン国

店の入口等にも、美事な彫刻がありました。又ローマには、サンタリヤ、トリニダ、サンジョバン、ヒッタリオ、其他沢山の荘厳華麗な大寺院や、凱旋門や、記念塔、又はフォロローマ大遺跡等、全く町ぐるみ古代の美術彫刻で覆われて大切に保存されており、ローマ興亡の永い歴史を物語っていて、吾々を心ゆく迄たのしませるようにと、観光にも全力をつくしているようです。

ローマのテベレ川の近くに、バチカン国と云う独立国があります。これはキリスト教の迫害により盛衰の変遷甚しい歴史をもっていますが、現在は面積わずか〇・四四平方キロ、人口千人と云う世界最小の独立国です。併し世界のカソリック信者は総本山たるここバチカンに五億の人々が常に蝟集し、偉大な勢力があり

実力は米、ソ、等数十万倍の面積や人口を持つ強大国にも匹敵するほどで、サンピエトロ大寺院は、カソリックの総本山だけあって、雄大にして善美をつくし、其の壮麗さは日光どころの比ではありません。

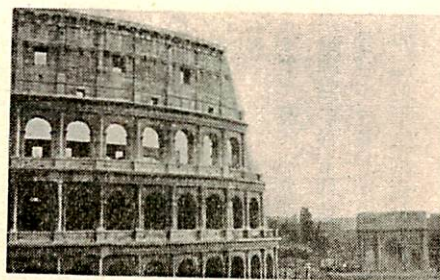
日曜や祭日には全ローマに教会の鐘が鳴り響き法王が真白の法衣に、白帽子の姿を宮殿の窓に現わすと、サンピエトロ広場の群集は、一斉にぬかずき、敬虔に十字をきって、祈りをささげる、その信仰の深さを思う時、日本の仏教も、かくあり度いと羨わずにはいられませんでした。

昔日本人岐部某と云うキリスト教信者が、日本のキリシタン迫害の時、のがれてキリストの聖地エルサレムを訪ね、遂にローマに辿りついて司祭と云う高職に迄昇進しましたが、故国のキリスト信者が迫害されている事を考えると同じとしていられず、帰国を決意し、アフリカ北部を東に進み、タイ、フィリピン等を通って薩摩の坊の津に上陸したが、のがれのがれた末遂に仙台に於て逆さ磔の刑に処せられたが、喜んで殉職しました。飛行機を利用してさえ、ローマに行くのは大変なのに、三百五十年も前に、よくも単身で、荒れ狂う砂漠や善地を突破したものだ、信仰とは云えその超人的な驚くべき史実は、サンピエトロ寺院を

参拝するに当り岐部氏の壮举を思い浮べ、敬虔の念にうたれました。

### コロッセウム劇場

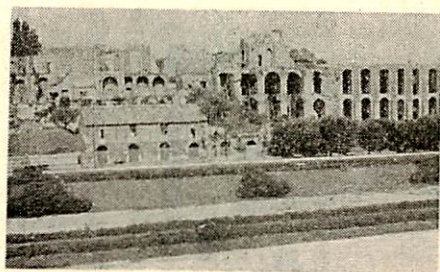
ローマが永い苦難の道を進んで繁栄するにつれて、国民にレジャーと、レクリエーションが、盛んになったことは、日本の現状でも、わかることですが、ローマの市民の休日は一年間に、二百日にも達しているそうです。そのため色々の競技や見世物が大流行となりました。そのうち私が最も感動したものに、コロッセ



ローマ コロッセウム

ウム競技場があります。長径二百米、三重の壁の円形で、高さ五十七米、七万人の収容力があると云われるマシモス劇場です。紀元前八十年に落成した時は、百日間連続で、各種の競技が行われ、一日に五千頭の猛獣が殺されたとのことです。これらのことが、博物

館に大壁画として、飾られているのを見ましたが、武器をもたぬ大勢の奴隷が、猛獣と死にもぐるいで戦っていたり、剣闘士の決闘の大壁画では、真剣勝負で勝った戦士が、倒れている相手を殺すか、生かすか、と見物人に聞き、見物人が親指を下に向けるのが多いと殺してしまふ。と云う意味で、女性が親指を下げている方が多く画かれており、このような残酷な競技が、盛んに行なわれたとき、此の中にはいると建物に、魔物の様に見える人間の残虐性の一面が窺われるよううで戦慄をおぼえました。ローマは一朝にして亡



ローマ カラカラ大浴場

びたのではないと、云われませんがこの時代がローマ繁栄の絶頂でした。ローマ人は風呂が好きだと見え、浴場が沢山あり、紀元二一六年にカラカラ帝が作ったカラカラ浴場は有名で、一度に一六〇〇人も入浴出来る巨大な浴室や、体育室、発汗室、微温室、水浴室等が、民衆の憩の場とさ

れていたが、風紀上、その他の理由で、次第にさびれ現在のローマ人は風呂嫌いになったのも不思議な話です。このローマ風呂が日本で流行しているのも、日本人が、新しい事を何でも、まねると云う物好きない一面を如何にも物語っております。

## カタコンベ

ローマ市外のカタコンベのかくれキリシタンの地下教会は私の最も印象づけられたところですよ。

昔ローマ教がキリスト教徒を迫害した時、キリスト教徒は地下に坑道を掘り礫にされた、殉教者の死体を納めたお墓が無数にあり、白骨が暗い坑内のそこそこに散在し全く無気味です。坑道は全長十七キロと云われ、手さぐりでやっと歩くこの道に沢山の別れ道があって、その辻々の壁には小さな符牒が彫り込まれて、案内者がなければ永久に地上に出られないと云います。左右の白骨がうす暗がり、ぼーっと見えて、鬼気せまる心地がします。やや明るくなつたと思つたら祭壇があつて、ローソクの灯の前に信者が、静かにお祈りをしていました。この様な地下教会が、数ヶ所あつて最も長いのは二十五キロもあると云われ、そのため、ローマでは地下鉄を敷こうとしても無数の坑道に

はばまれて、困難だとのことですよ。

併しこのようにキリスト教迫害が、永い間続けられた事は、偉大な地下墓地で忍ばれるのですが、当時掘り出した土石を外部に運ぶことは、到底秘密には出来ない膨大な量を思う時、このかくれ教会なるものは、公然の秘密であつたのかも知れません。

これは日本でもキリシタン信者が従容として、礫になつたことや、今にも残る山奥のカクレキリシタンの信仰がつけつけられている事につながるものでしょう。

## スペイン

スペインは長崎で、おなじみの国ですからなつかしい感じですよ。スペインの国土は四角な形で北は欧州、西は大西洋、南はアフリカ、東は地中海に面しているので、気候も、地形も、人種も、物産も、歴史も、四分されている面白い国ですよ。

首都マドリッドはその中央にあり、市内見物を楽しみますが、欧州化しているので、刺激がありません。

トレドの美術館は、グレコや、ゴヤ等の傑作の宝庫で、名画の多い点では、世界一と云われています。

町の道路の中央には、二十米位の街路樹が、うっそうと茂り、美しい公園や、その中の、ドンキホーテ

の銅像は印象的であり、又ナボレオンや回教徒との戦争のなまなましい疵痕が残っております。

## 残酷な闘牛

スペインは世界一の闘牛の本場だけに、千数百以上の闘牛場があって、世界各国から見物に来る、と云われる程の、スペインの国技であり、ドル箱でもありません。週に二回開場すると云う大きな闘牛場を幸い見物することが出来ました。古色蒼然たる大きな円型のグラウンドに入ると、超満員と云う盛況ぶりに先ず驚きました。階段式の見物席と

広い闘牛場との境には、一・五米位の頑丈な柵がぐるっとめぐらされて、所々に人がやっと通れる通路があり、もし闘牛士が牛に追われて、あぶなくなるとこの通路に逃げ込むようになっていますが、それが間にあわぬ様な危険の時はこの塀を飛び越えてにげこみます。



マドリッド 闘牛

その危機一髪のスリルを幾度か見ました。時には牛もこの塀をのりこえることがあるそうです。

先ず楽隊のファンファレーにつれて、入口から美しく着かざった、闘牛士、乗馬隊等、数十名が場内を一週すると、古色豊かな入場式に満場の観衆は、拍手して迎えます。これが終ると、正面入口から真黒な牡牛が、のっそりとはいってきます。この牛は闘牛用に特別に沢山養成されているとのこと。暗闇から急に引出されて、うろろうろしている牛に向って、数人の闘牛士が各所で、桃色の大布をふるると、牛は猛然とこれに向って、突進するので、闘牛士は柵の中に逃げ込むのですが、危険だと思いと、他の人が横で盛んに布を振って、牛の方向を変えるのです。このスリルをくり返すうち、牛が混乱状態になる時を見はからって、金色や銀色のまばゆい程美しい服装をした闘牛士が現われ、中央で赤い布をふりまわすと、牛はこの布目にかけて猛進してくる。アッと云う寸前に体かわすと、牛の角が、腿のすれすれの処を突走の時など、はらはらさせられます。時には牛の角に布をとられたり、今度こそやられたか、と思うような、はなれわざをします。丁度日本の相撲と同じ様で、闘牛士にも階級があって、技も又四十八手もあるらしく、牛が突進して来

て、危険だと思われる時、みごとに体をかわすと満場  
われる様な歓声がわき起ります。又闘牛士が危険だと  
思われる時は、他の闘牛士が牛の心を他にそらす等、  
そのチームワークは見事なものです。

次に闘牛士は突進してくる牛の正面から、肩のこ  
ろに五尺位の美しい飾りのある剣を二本ずつ、つきさ  
すのを二回やるのですが、危険であるだけに、観衆は  
息をとめて見入ります。危険なことだけに、正確につ  
きさされると満場に拍子がわき起ります。次に鎧をさせ  
た馬に乗った騎士が二人入って来て鉤槍を牛の首の所  
に三十センチ位突き刺すと鮮血がほとばしり出て、牛  
は狂乱して馬につきかかりますが、時には馬が墮され  
ることがあるそうです。狂乱している牛を大勢で布を  
ふり死ものぐるいで猛りたつところを、最後に横綱の  
闘牛士が長い剣を頭から心臓に突き通すと、さすがの  
猛牛も、パタリと横倒しになって即死するのです。時  
には一回ではトドメをさす事が出来ず刺した剣を又抜  
いて、刺しなおすのです。血だらけになって牛が死ん  
でしまうと、三頭立ての馬車が出て来て、あわれな牛  
を、綱で引っ張って退場します。この残酷極まる闘牛  
を三回見ましたが実にこの凄惨なゲームは日本人の性  
格には向かないようでした。場外に出た私達一行は

皆、ホッといたしましたでしたが、スペイン人の残忍性は色  
々の物語りによっても知ることが出来ます。

## スペインの古都 トレド

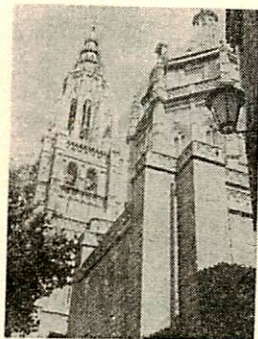
マドリッドから二時間位、自動車で南に行くと、古  
都トレドに着きます。途中は砂漠の様な草原地帯で、  
畑も草を焼いて、その跡に種子をまくと云う原始的な、  
農法であり、所々が山火事の跡のように真黒になって  
いるのをみました。

トレド市は高台にあり、外郭が厚い城壁で囲まれて  
いて、「太陽の門」と云う円柱の大門は独得の建造物で  
す。城壁の東側は絶壁となっており、その下を大きな  
タホ川が青い渦をまいて流れています。橋を渡り向  
うの高台のレストランで昼食をとりました。ここか  
ら眺めるトレドの町は茶褐色の陰惨な感じをうけまし  
たが、いよいよ町内に入ると、カテドラル大寺院の沢  
山の尖塔が空中に聳えて光り非常に美しく見えまし  
た。この寺院は、十五世紀の建築ですが、数しれぬ大  
きなステンドグラスには、目を見はりました。又中央  
の礼拝堂は木彫ですが非常に複雑絢爛たるもので、東  
京三越の一階の彫刻「まごころ」の比ではありません。

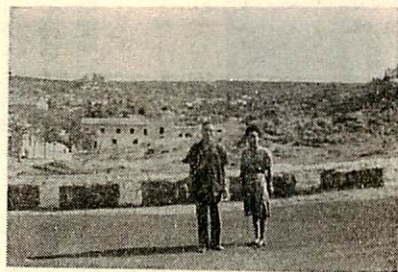
トレドの美術館には、エルグレコ、バンダイク、ゴ



ヤ、等世界の名画が実に沢山陳列されています。又グ  
レコの家と云うのがあって、グレコが四十年もこの家  
で絵を画いたとのこと、  
石造りの中に古びた、木  
造の室もあり、庭に古井  
戸の様なものがあって、  
下をのぞくと、地下室で  
暑い時はこの室で画いた  
との事、又地下室もある  
昔の城跡の様な感じだそ  
うです。皆よく保存され  
て観光客に親しまれてお  
ります。



カテドラル大寺院



トレド郊外 オリーブの森

があります。この城を守った、將軍の子供は、二人とも  
捕りよとなつて、兄は下の川に投げ込まれて殺され、

アカサール王宮  
は二百年前革命軍  
に包囲され外面は  
砲弾で見えるかげも  
ない程、破壊され  
ていますが、ここ  
には有名な物語り

弟は敵將に「父の將軍に降服をすすめれば、命は助け  
てやるから電話をしろ」と云われたので、先ず電話口  
で「お父さんですか」「そうだよ」「私は殺されてもよ  
いから死守して下さい。お父さんキッスしましょう」  
と云いきれぬうちに銃殺されたと云う。実にあわれな  
物語りの父子の対話をくわしく、日本語でかいて絵の  
下に、はってあったのは心に滲みしました。この城には  
女子供をいれて、僅か千三百名しかいなかったのです  
が、よく死守して、遂に援軍来りて、敵をげき退した  
と云う悲壯な歴史の跡を見ました。

## フランス パリー

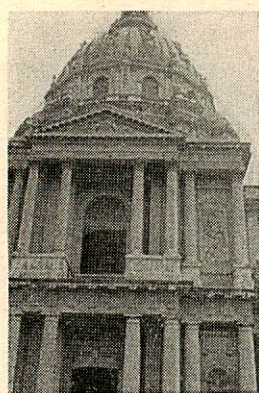
中近東古跡めぐりの私達一行が、パリーまで足をの  
ばしたのは戦争のため、アラブ諸国から、イスラエル  
に入国する事が出来ないの、はるばるフランスまで  
足を入れて逆に、ユダヤ国イスラエルに入国したので  
す。パリーは日本観光客が必ず訪れる所で、今更こと  
新らしくかくまでもなく、又僅か一日の滞在で町の中  
をぐるぐるのり廻したので本当のパリーの情緒等味わ  
えるはずがありません。しかし一カ月近くの炎熱砂漠  
の旅からのがれて、パリーに入ったら、とたんに雨にあ  
い涼しく、雨霽に煙るエッフェル塔は絵のようでした。

町はドゴールが建物全部洗わせたので、古都的美観は全くなく戦後の日本と変わりありません。しかし永くここで遊んだら、はなやかな夜のパリーを満喫するところが出来たと思います。

世界一と云われるルーブル博物館では、何千万枚かと思われる名画の中から、ミレーの晩鐘、聖母マリア、ナポレオンが神父をさしおき、自ら王妃に戴冠させている絵等、わずか一時間あまりで、ガイドにはぐれぬよう、他の絵をみるひまもなくかけ足で素通りしました。

ミレーの晩鐘は一米位の小さな画でした。

次にステンドグラスで名高いノートルダム宮殿、エッフェル塔、エトワール凱旋門、其他かけ足で見物しました。



パリー ナポレオンの墓

画家のあこがれるパリーだけあって、モンマルトルに画家の丘と云う処があって、大勢の画家がそぼ降る雨にぬれ乍ら絵や、似顔等画いて売っている、その中に日本人画家二人を見て、何だか嬉しい

ような、あわれなような複雑な気持になりました。

アンパリードの丘にナポレオンの墓があります。ナポレオンがコルシカ島で、「吾祖国を愛す、どうかセー又川のほとりに墓を建ててくれ」と云って死んでから、百年を経て、コルシカ島からナポレオンの骨を持ち帰って、此の会堂の中央に立派な大理石のお棺を造ったのです。観光客は必ず、このお墓におまいりする事になっているとか、英雄ナポレオンは死後も入場料で、フランスの外貨かせぎに一役かっております。(つづく)

## 西遊記(其ノ四)

びっくりした悟空は、本性を現わして、耳の中から如意棒を取り出し、

「こらっ」と一声。

「お前たちは、どこの化け物だ。よくもおれの桃をぬすんだな！」

仰天した七人の仙女、いっせいにひざまずいて、

「大聖さま、どうかお怒りにならないで、わたしたちは怪しい者ではありません。王母さまの云いつけできた七衣の仙女です。王母さまが宝閣を開放して蟠桃

大会をもよおされるので、桃をつみにきたのです。先ほど、ここに来て園の土地神たちにお目にかかり、大聖さまをおたずねしましたがお姿が見えません。わたしたち、王母さまのお言付けにそむくわけにはまいりませんので、取りあえずここで桃をつみました。どうぞおゆるし下さい」

悟空、えんま顔から急に仏顔になり、

「仙女さん、まあお立ち。王母が宝閣を開放して宴会を開くと云ったが、誰を呼ぶんだね」

「会の集りには、もともと古いしきりがありまして、招待される方々は、西天の釈迦、老子、菩薩、聖僧、羅漢、南方の南極観音、東方の崇恩聖帝、十州三島の仙翁、北方の北極玄靈、中央の黄極黄角大仙、つまり五方五老です。それから五斗星君、上八洞の三清、四帝、太乙天仙などの方々、その他宮々の大小の神々がうちそろって、蟠桃の嘉会におこしになります」

悟空、にやにやして、

「わしは呼ばんのかね」

「うかがっていませんが」

「わしは齊天大聖なのだ。この孫さまを招待したつてわるいことはあるまいに」

「今申しましたのは、これまでの会でのしきりです。

今度の会のことは存じません。」

「なるほどもつともだ。お前さんに罪はない。まあ、ちょっとそこに立っていてもらおう。わしは、ひと走り行って様子をきいてくるから」

悟空は印を結び呪文をとなえると、仙女たちに向かつて、

「動くな、動くな、動くな」

と声をかけた。これは、がんらい「定身の法」であるから、七人の仙女は、いずれも腑ぬけのようになってしまう。白眼をあげたまま、桃の木の下に立ちすくむ。悟空は祥雲をとばして、園をとび出し、瑤池を指しまっしぐら。すると途中で赤脚大仙（仙人の名、赤脚は素足のこと）にばったり出会ってしまった。悟空は、ちょっと思案したすえ、一計を思いついた。大仙をだまして、自分ひとりこっそりと会へ行こうというのである。そこでたずねた。

「ご老体はいずれへ」

「王母のお招きで蟠桃の嘉会へまいるところです」

「あなたはまだご存じないと見える。じつは、わたしの舂斗雲が速いところから、天帝のお云いつけで皆さまをお迎えに五方へとんでいます。今回は、まず通明殿で式をあげ、そのあとで宴会に向向っていただ

くことになっています」

大仙は正直な人、悟空のことばを本当と思ひこみ、瑞雲の向きを変えて、通明殿の方へ行つてしまった。

悟空は雲を飛ばせながら、ひとこと呪文をとなえたと、からだをひとゆすりゆすつて赤脚大仙の姿と変じ、瑤池へといそいだ。またたくまに宝閣に到着。悟空は雲をおろして、そつと中にしのびこんだ。見れば、宴席は整然としつらえられているが、客は一人も見えない。悟空が見ていると、ふと酒の香が鼻をついた。いそいでその方を見ると、右手の長廊下に数かめのうま酒がおいである。口からよだれが止めどなく、すぐにも行つてのみたいが、そこには酒番の役人がいる。彼は神通力を使い、毛を数本ぬいて口に放りこむや、かみくだいてふき出すと呪文をとなえて「変われ」と叫ぶ。と毛は数匹の眠り虫に変じて酒番たちの顔にとびついた。番人たちはぐんなり、眼はとろとろ、やがて眠りこけてしまった。悟空は、八珍の佳餚をたずさえて、長廊下にはいりこむと、酒がめにしがみつき、飲み込んだ。とうとう酔っぱらつてしまい、うつらうつら思うに、こりゃまずい。そのうち客でも来たら、ただではすむまい。面倒だ早くうちへ帰つてねることにしよう。

ふらりふらり、足にまかせて歩いているうちに、いつか路をまちがえて兜率天宮に来てしまった。悟空、はつとさどつて、

兜率天宮というと三十三天も一番上の離恨天、太上老君のおる処だが、どうしてこんな所へまよいこんだのだらう。まあいいや、前々からこのじいさんには会いたいと思つていたが、来る時がなかったのだ。足のついでに、じいさんをたずねるのも一興。と衣紋をつくらつて中にはいつて行つたが、誰もいない。

老君は、燃灯古仏とともに、三層楼の朱丹凌台で講義をしており、大勢の仙童や官吏たちが左右に侍立して拝聴しているところ。悟空は、丹を煉る部屋まではいりこんでさがしたが、姿がみえない、ふと丹を煉るかまどのそばに、五つのふくべがおいてあるのが目についた。ふくべの中は、煉り上げた金丹がいっぱいである。やつ、これは仙家の至宝と云われるやつ、この孫さん、道を修めてこの方、内外相通の理を悟了したので、金丹なども煉つて人助けをしたいと思つていたが、残念ながら、そのひまがなかった。今日こそごえんがあつて、こいつにお目にかかれたわけ、じいさんのすをさいわい、ちよいとばかり味を見せてもらいましょう。

かれは、さつそくふくべを逆さにして全部外にこぼすと、いり豆でもかむように、みなほおぼってしまつた。そのうち金丹のききめで酔がすっかりさめてしまつと、又考えた。

今度はどえらいことになるぞ、玉帝にでもしれると命があふない。ドロンだ、ドロンだ。下界に帰つて王様になつた方がいいや。

そこで兜率宮をとび出すと、西天門から「隠身の法」を使つて、逃げていく。ほどなく雲を下げて花果山におり立つた。

「皆のもの、帰つたぞ」

かれが大声で叫ぶと、猿どもはひざまずいて、

「大聖さまはずいぶんのん気ですよ。われわれを置いてきぼりにしたまま、長いことほつたらかすですからね」

悟空

「ほんのしばらくじゃないか」

と話しながら、洞の奥へ通ると、四健将が叩頭の礼をする。終つて、

「大聖は天上にざつと百年もおられましたか、どんな役を授かりましたか？」

と尋ねる。悟空にこにこして、

「おれは半年ほどだと思ふのに、百年とはどう云ふことだ」

「天上の一日は下界の一年ですよ」

「今度はいいことに玉帝に可愛がられてな、わしの云うとおり齊天大聖にし、齊天府を立てたうえ、伴廻りとして仙吏をつけてくれたよ。その後、わしがひまだというので蟠桃園の管理を云いつかつた。ところがついこの頃蟠桃の大ふるまいがあつたんだが、それにおれをよばないんだ。おれは、先手をうつて瑤池に出かけて行き、その仙酒仙殺をさんざん盗み食いしてやつた。瑤池を出たあとで、太上老君の宮殿にまよいこんだんだが、そこではまた五つのふくべに入れてあつた金丹をこっそりいただいたつた。玉帝の罪を食うのはごめんだから、いまにげ出して来たわけさ」

怪物どもは聞いてよろこび、さつそく酒やくだ物をととのえて悟空をねぎらい、椰子酒を碗になみなみとついでさし出した。悟空は一口のむと顔をしかめ、

「こりゃあまずい、まずい。おれがけさ瑤池でこちそうになつた時、長廊下にはすてきな酒がどつさりあつたつ。お前たちまだのんだことがないだらうからおれがもう一べん行つて幾瓶か盗んで来てやろう。半杯ずつ飲んだら、誰でも不老長生になるぞ」

猿どもは無しように喜んだ。悟空は、洞門を出るや一つとんぼ返りを打つと、隱身の法を使ってまっすぐ蟠桃の宴席にとび、瑤池の宝閣にはいりこんだ。

見ると、その連中はまだグーグー眠っている。これはかめの大きいのを選んで両脇に二つかかえ、両手にも二つぶらさげると、すぐさま雲を返して洞に帰り、仙酒会を開いて、一同歡をつくした。

さて、かの七人の仙女は、悟空に定身の法をかけられてから、まる一日たつてやっと法がとけたので、めいめい花かごをさげて帰り、王母に復命した。王母、

「蟠桃はいくつつみましたか」

「小桃を二かご、中桃を三かごだけつみましたが、うしろの大桃は一つもありません。大聖がこっそり食べたんだろうと思ひながら、さがしていますと、だしぬけに大聖がとび出して無法にもなぐりそうにします。そして、宴席を設けて誰をよぶのかと尋ねますので、前の会のことをひととお話ししましたところ、やにわに法を使ってわたくしたちを金しぼりにしてしまいました。今になって、やっと法がとけて帰って参りました」

王母は、それをきくと、さっそく玉帝にお目どうりし、くだんのことをくわしく言上した。

と、それが終らぬうち、例の酒番の連中が仙官に伴

われてやって来た。

「何者かは存じませんが、蟠桃の大会に狼ぜきをはたらき、王液けいしょう(うまき酒)をぬすみくらい、八珍百味もまた、ことごとく食いあらされました」

と、また四大天師が、

「太上老君が参上しました」

と奏上するので、玉帝は王母とともに出迎えられる。老君は拝を終つて奏上した。

「わたくしめのところでは、九転の金丹を煉り、陛下のご臨席を得て、丹元大会を催す所存でおりましたところ、はからずも賊のために盗まれました」

玉帝はこれを聞いて、いささか不安になってきた。

と、ほどもなく、また齊天府の仙吏が叩頭して、

「孫大聖はお役をおこたり、昨日遊びに出かけてから今になつても帰りません。どこにまいましたものやら、とんとわかりません」

玉帝がさらにうたがいをこくしていると、赤脚大仙がまた言上におよんだ。

「わたくし、王母のお招きをうけ、昨日宴に赴く途中、齊天大聖にあつたところ、わたくしども客は、先に通明殿に参つて儀式を行ない。のち会に出向くよう、との陛下の仰せがあつたと申します。そこでわた

くしめはすぐさま通明殿に引き返しましたが、陛下のみ車をおみかけいたしません。そこでまたいそぎこへ参りおまちいたしました」

玉帝は、ますますおどろき、

「こやつにせ詔をもつて卿をあざむきおつたわ。即刻しゅうほう霊官に命じて、かやつゆのゆくえを尋ねさせよう」

霊官は仰せをかしこみ、即座に天宮を出て、所々をしらみつぶしに尋ねたすえ、

「天宮をさわがせました者は齊天大聖です」

と復命し、今までのことを全部報告した。玉帝は、大いに立腹し、即座に四大天王を派けん、李天王と哪吒太子にこれを助けさせ、二十八宿を初めとし多くの宮星など十萬の天兵を發し、下界に向わせ、花果山をおし包んで、かやつを捕え、処断するよう命じた。諸神は、ただちに軍をととのえ、天宮を進發した。李天王は、天兵たちに命令して花果山をとり囲み、水ももらさぬ陣を張った。上下には十八張の天羅、地の綱をはりめぐらし、まず九曜悪星を一番がけとした。九曜星は兵を率いて洞の外に到着、大音声に呼ばわった。

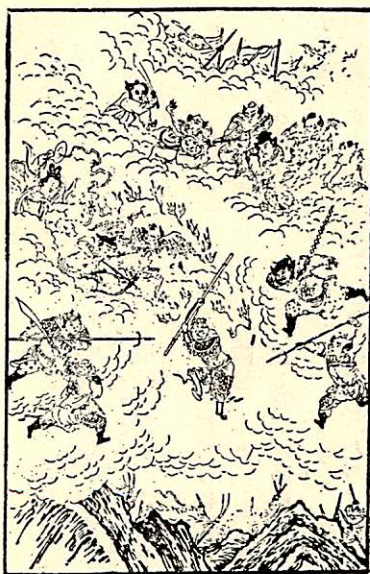
「大聖はいずれにある。われらは、なんじをからめとるため天上界より遣わされたる天神なるぞ、とくと

く降参いたせ。万一いなやのいの字でも申さば、なんじら、ことごとく打ちとつてくれる」

小猿はあわてて奥に進した。

「外に九人の凶神が、おれたちは天上界から派けんされた天神で大聖を征伐に來たと云つております」

玉帝天兵を下界に降す



悟空は魔王や健將たちと、ちようど酒をくみかわしていたが、その知らせを聞いても、どこふく風、

酒のあるときや 酒をのめ

そののいざごさ ほっておけ

と歌っていたが、それも終らぬにまた一むれの小猿がとびこんで来て、

「あの九人の悪神が、さんざん悪態をつきながら、そとで戦いをいどんでいます」

と告げる。悟空は笑って、

「かまうなかまうな」

飲んで歌って 楽しむことよ

功名なんぞは どうでもよい

と、歌い終らぬにまた一群の小猿が知らせた。

「ご主人さま、九人の悪神どもは、門を打ち破って攻めこんで来ました」

悟空は大いに怒り、独角鬼王に七十二洞の魔王を率いて出陣させ、みずからは四健将を引き具してつづいた。鬼王は妖兵を指揮して洞門外に敵を迎えうったが、九人の悪星に、押しまくられ、鉄板の橋のほとりで支えているだけで、一步も出られない。わいわいやっているところへ悟空がやって来た。

「そのけ」

と叫ぶや鉄棒をとり直し、素振りくわけて、打って出た、九曜星はいっせいに引きさがったが、また陣を立て直し、

「命知らずの弼馬温、なんじは十悪の罪を犯したるぞ。先には桃を盗み酒を盗みくらしい蟠桃の大会をあらし、さらには老君の仙丹をくすねとり、その上酒を盗

み来って、ここでのみくらうとは。罪の上塗りとはこのこと、よく考えてみよ」

悟空はせせら笑って、

「そんなこともたしかにあった、それがどうした」

「われは玉帝の金旨を奉じて汝を捕えに参つたのだ。はやく降参すれば、ここな畜生どもの命は助けてやるう」

悟空はかっとなり、

「このこっぱ神ども、なんの法力もないくせしてな、よくもへらさず口をたたきやがったな。そら孫さまのこの鉄棒をくらえ」

九曜星がいっせいにおそいかかる。悟空は棒をふりまわしつつ、なぎたてれば、九曜星、へとへとになり、武器を引ずりながら、逃げ出した。本陣の中にとびこむと李天王に報告した。

「かの猿王は、なみなみならぬ武勇のもの、打ち勝つこともあたわず敗退してまいりました」

李天王はただちに四大天王と二十八宿にとつて代わらせ、いっせいに兵を進めて戦いをいどめば、悟空また少しもひるまず、家来達を派して洞門外に陣をしいた。そして朝の八時頃から夕方まで混戦がつづいた。

つづく



## 鳥居観音に詣でる記

(埼玉往来第十七卷)  
二号より転載

埼玉県人会理事、元埼玉銀行頭取平沼弥太郎先生の発願によって建てられている白雲山鳥居観音に、去る十一月十九日小春日和に恵まれ、浦和講社に加わってお詣りすることが出来た、その幸に感謝している。

その日埼玉亭前を出発した一行五十五名、バスに揺られて二時間有餘、志木、所沢、入間市、飯能と武蔵野風景を眺めつつ名栗溪谷に入る。

今を盛りの全山の紅葉、名栗川の清流に沿って進む程に見馴れぬバゴダの塔が印象的に眼に入る。

十一時を廻ること十分、予定の如く観音様に到着客殿庫裡に招ぜられて茶菓の馴走になる。

観音堂内に一同正座して観音経を誦誦する。

平沼先生が多年心血を濺いで彫刻された聖観音を始め如意輪観音、不空羂索観音、馬頭観音、准胝観音、千手観音の七体が色彩豊かに安置され、当代一流画伯の手になる花鳥の図で天井、窓は埋められている。

けんらん豪華な近代的美観と崇厳な雰囲気の中に僧正のすみ切った読経の響きが参籠の人々の心底に浸み透って「洗心」される一刻でもある。

この刹那私は平沼先生が今は亡き御母堂様の御遺志

によってこの大殿堂建設を発願され、終生の大事業として工を進めておられる尊いお姿——平沼先生の御孝心、そして母性の感化力の偉大さに今更の如く感激していたのは私一人ではなかったと思う。

読経が終り焼香を済ませ、いよいよ間近に拝観した折誰かが遠慮勝に言った「色っぽい観音様だな」、「そうです、そうなのです、大変色っぽいのです」側から説明の方が強調された。

成程、そういへばそんな言葉がびったりするかも知れない。私はそれでよいのだと思う。人間は畢竟人間でしかあり得ない、本能の動物であり自然の賜である。心の抛り処を、手の届かぬ処に求める必要が何である。この、人間の皮膚を感じさせる観音像は、母の乳房に通い、所謂「女」を思わせる、しかもその高貴な相は人々の頭を垂れさせずにはおかない。

生来無信仰の私がすっかり好きになってしまった。悩みの多い時は眼をつむって思い出そう、きつと心の糧になると思う。と同時にまだ知らない方々に教へて上げたい気持で一杯になった。一度機会を見て是非お訪ね下さいと誰にでもいいたい。

此処には、憩いの場としての観世音センターがあり、浴場も舞台もある。私達は大広間でゆっくりと食事を



本堂観音鳥居わぎざで者詣参

とり、踊りたい人は舞台に上り、風呂に入った。時間があるので、思い思いに頂上近い玄奘三蔵の廟に参詣し、三時再びバスに集合して、夕方方の空気の冷え込む中を浦和解散となった。実に楽しい一日であった。

(四二・一一・一九)

本文を書かれた西喜美子さんは、鳥居観音浦和講の講員のお一人で、現在浦和の別所に住まれており、財団法人埼玉県人会に御勤務になっておられます。尚本文転載に就て、埼玉県人会の関理事さんの御尽力に心から感謝申し上げます。 合掌

## 白雲山の浅い春

登山口から仁王門へ

睦月、如月、弥生の頃の白雲山は静寂そのものである、時折参拝客が三三、五五、本堂に詣でられた後入園なさって、散策がてら、ゆっくりと山の静けさを味わってお帰りになるが、その方達はしみじみと、この自然の中に浅い春の息吹きを感じて、その感覚を新たにされます。

遊歩道は登山口からなだらかに、枯草と冬木の中に曲折して登り坂になっている。いく曲りかすると、中腹の平らな広場がある。正面が仁王門、左後方の丘に子育て地藏堂がある。このあたり冬陽を浴びて、静けさそのものである。ここの休み台に腰をおろして、たのしそりに語り合う人、カメラを手にそこ、この景色を撮る人、スケッチ等する人々にはよい所である。

この平らな所から南の傾斜地には多数の椿の木がむらがって生い、すでに蕾もふくらんでいるのに気がつく、この頃のよい日和は、きまっと雲は西から東へ流れ、吹く風は武甲嵐と云ってつめたけれど、山が屏風となり、木立が風をよけてくれるので、山の中は割合に静かである。

## 奥の院への道すじ

たくましい阿吽の仁王をながめて、門をくぐれば道は左に折れてやや急坂となるが、行く程に静けさ是一段と深まってくる。

途中の岩山に点々と老樹がその根張りを現わして、風雪にもたえた跡を物語っている。その梢をもれる浅春の陽光は淡く地面にそそいでいる。その岩かげや木の根もとをのぞけば、そこにはいつか紅紫色の葉が地表にひらき、小さな蕾をもった岩かがみが春をまっているのに気がつく、しかし多くの人はその珍らしい植物には気がつかぬ、花が咲いて初めてこのやさしい花に目を引かれるのだが、ここ全山に動植物愛護の立札がある通り、誰も捕かく、掘り取り、は勿論手折ることも止めてあるので、園内の植物は年と共に生長し、境内も次第に整って来ている。

それと云うのも、この園内の手入れ、管理には常日頃平沼先生の丹精が積み重ねられたお蔭で、今でもご自分から手鎌、腰なたをもつて境内くまなく足をふみこんでは、下草を刈り、不用な樹木を伐り除いて、一本一葉の調和を見て廻られて、現在このような整ったものにされたのである。

今年の春の盛りを思いながらゆっくり探勝しよう。

## 修せざればあらわれず

泉 竜 庵

ある朝近所の某家庭を訪問して、その家の戸口を開けようとした時、家の中で声がかして「サア……父ちゃん（夫のこと）この花を見て下さい。うちの庭に咲いた花ですよ。」

その家のおかみさんが、お仏壇の花を取りかえながら亡き夫の御位牌に話しかけているのだった。

この情味のこもった、ぬくもり深い言動に一瞬私は名状しがたい感動をうけた。

その花を上げたからとて、何の受け答えもしてくれぬ訳ではない。上げる方でも誰からもほめてもらおうとも、報酬を求め様としてはいない。ただそれは亡き夫へのひたむきな思慕の情、自然にわき出る敬愛の心の発露である。これこそ人間性の極致であり、仏性の顕現に外ならない。この心温まる情景は、供える一輪の花以上に香高いものである。

昨日も、今日も、そして、明日も、世間は雑音に明け、雑音にくれてゆく、一步外へ出れば、そこには交通地獄が待ちかまえている。その交通禍も通行中の人命はおろか、屋内に迄襲いかかってくる。こんなことは序の口で巷には歩行者のすきをねらつての引ったく

り、銃砲刃物での渡り合い、子女誘かに強盗殺害、又官公庁、公共団体役職員の公金使い込み、拐帯逃避、紙貨幣や文書偽造等々数え上げたら切りがない。人の住む世界とはどうしても信じられない。無人の境を横行活歩している犯罪の姿である。天下の御法度も何のその、人を見たら泥棒と思えとは言い古された言葉だが、文明の進度高いと自他共に許している我国のこの頃、この言葉に、なる程とうなずかざるを得ないとは情ない人の世である。

犯罪がこの頃始まった訳ではないが、その手段に於て、規模に於て、極悪さに於て到底従前のそれとは比較にならない。

何故だろうかとこれを静かに考えた時、大ざっぱに云って、人間性の喪失に外ならない、環境の悪さや、日常生活に於ける刺激の強さも副次的な原因であつて、あくまで主原因ではない。

私共は一人一人の個体であっても、社会を形造る一員、組合せの中の一人であることを忘れてはならない。自分の存在と、他人の存在を切りはなして考えることは出来ない。人間性を失った社会程危険なものはないと思う。この頃の世の中を見渡した時、もはや地球上には安全地帯がない様に思われる。さりとてはるか

天上界の月の世界と雖もそろそろおびやかされつつある有様である。人間到る処青山ありとは昔のこと、今は人間到る処火山ありと云いたい。も少し地に足のついたあかるい信頼出来る世界を要求しているのは敢て私ばかりではないだろう。

こんな不安定な世の中でも、光明の世界はいくらもある。誰から頼まれなくとも、御仏壇に花を供えるこの心情、これは私どもの人間本来持った仏性である。お互がこの仏性を出し合えば至極平おんで清らかな世の中になっていく、が然しこの様になる即ち培われる原因がある訳である。道元禪師がおっしゃった様に「修せざればあらわれず、証せざれば得る事なし」と、仏性の培い、それは自らを信じ、同時に絶対の力を借用することである。とりも直さず信仰の力、仏菩薩のお力を仰ぎ、同行二人、この絶対のお力の前には横すべりや、我まま勝手は許されない、むしろ正しい住みよい世界へと誘導されていくのである。仏菩薩を崇敬する心と形がととのつて始めていわゆる修することによってのみ、御利益と功德を蒙ることになる訳である。唯手をこまぬいているばかりでは、み仏は良策を授けてはくたさぬ、同行二人の世界に身も心も投じることである。ここから住みよい人の世が生れる。

## 正月料理をセンターで

## 謹賀新年

名栗観世音センターでは、本年も正月料理を、特色あるものとして、皆様にご利用いただきたく、入場料を含めて五品の定食で金五百円に力をそそぎ、サービスをモットーに、大いにつとめます。

静かな部屋から窓外の景色を眺めながら、早春のレジャーをたのしんでいたいただきたいものです。

暖房のある部屋はいつも春のよう。

そして大ききてきれいな風呂には、いつも皆様に適当した温度のお湯があふれています。

窓下をのぞけば、名栗川の清流が冬の陽ざしを返してせせらいでいます。

川鳥が、窓の下をかすめて、時折とぶ、

白雲山に、白亜の三蔵塔が陽に映えているのが、印象にのこるでしょう。

新年の特別料理で、たのしい一日をどうぞ、観世音センターで。

皆様のおこしを心よりおまちしております。

講 中 名		地区名	講元名(敬称略)
サヤマ不二講中	〃	狭山市	片山道則
不二サッシ	〃	川崎市	佐野友二
白雲	〃	武蔵野市	宮沢庚子生
埼玉トヨペット	〃	与野市	梶谷真一
同和	〃	与野市	井上正雄
茂木	〃	与野市	茂木落喜
浦和	〃	浦和市	藤沢帝
狭山	〃	狭山市	石川求助
埼玉不二サッシ	〃	川口市	野口秀雄
川越	〃	川越市	原田愛助
川越通り町	〃	〃	斉藤新作
所沢	〃	所沢市	斉藤定治
飯能	〃	飯能市	武居藤吉
福寿	〃	飯能市	植竹真三
西武仏所護念	〃	飯能市	横川一郎
青梅	〃	青梅市	宮沢庚子生
大柳	〃	〃	荒井多一
青梅千ヶ瀬	〃	〃	荒井多一
名栗	〃	名栗村	平沼寛一郎
観音センター	〃	〃	竹井貞雄

講 中 名 地区名 講元名(敬称略)

目 黒講中	目 黒	若林五郎
五日市	五日市	鈴木嘉三
浜田屋	浅草	吉崎弘
福徴	東京	新妻次郎
東光	〃	鈴木国仁
片倉チッカリン	〃	平林賢恵
八王子洗心	八王子市	内田男三郎
秩父	秩父市	松本忠太郎
豊岡	入間市	鈴木すえよ
坂戸	坂戸町	磯田宗一郎
加須	加須市	宇和野拓植
毛呂山長瀬	毛呂山町	森正雄
喜代永	東京	喜代永政雄
エーザイ	本庄市	岸本寿雄

鳥居観音年中行事

一月一日	新年祈禱会
一月十七日	月例法要(毎月十七日)
二月三日	節分会
二月十五日	积尊涅槃会
三月彼岸	春季法要(戦没者特別法要)

四月八日 积尊降誕会  
四月十七日 春季大祭

五月 玉華門落慶式  
七月十日 四万六千日特別法要

八月十六日 孟蘭盆流灯大供養会、煙花大会、盆踊大会

九月 彼岸 秋季彼岸法要  
十一月十七日 秋季大祭

十二月八日 积尊成道会  
十二月三十一日 除夜特別供養会

お知らせ

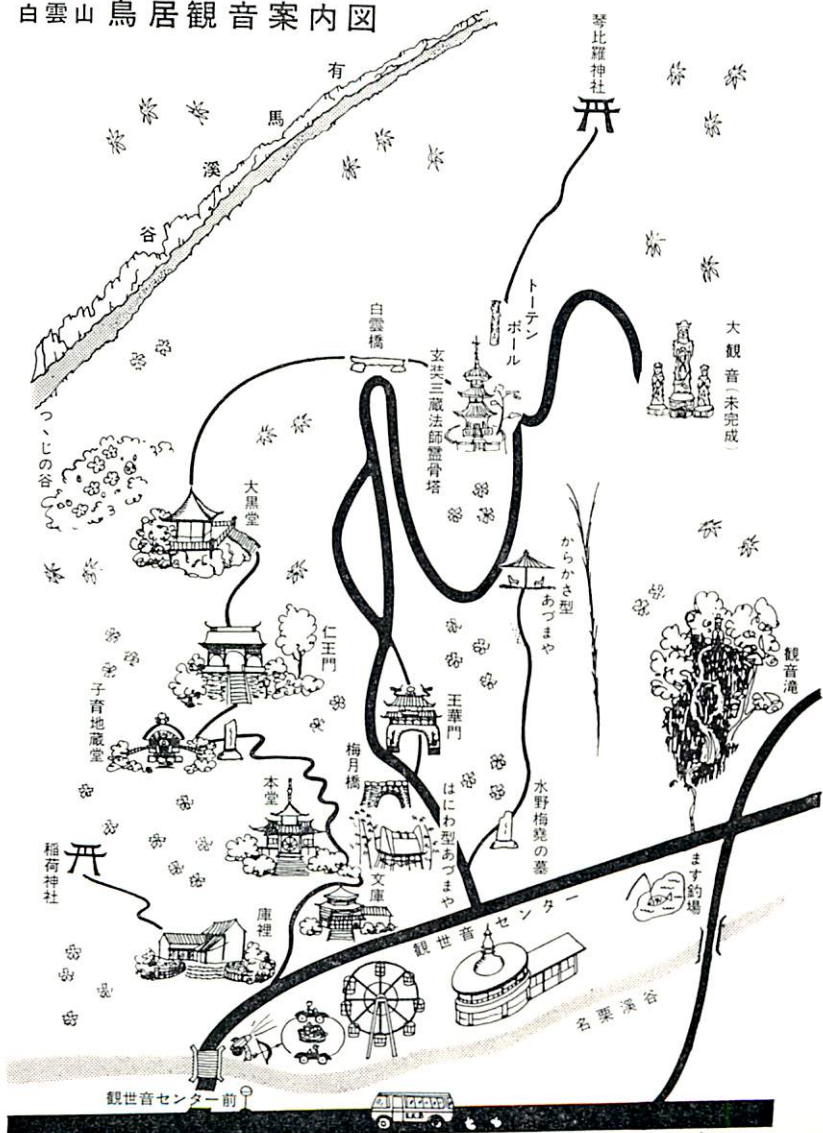
桐江先生の書をご希望の方は希望題字ご記入の上、寺務所まで御申し込みください。

鳥居観音のしおり 第九号

発行日 昭和四十四年一月一日 每号定価貳拾円  
編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三  
発行人  
印刷所 浦和市 武州印刷株式会社  
発行所 鳥居観音

電話 〇四二九七〇四一五番

# 白雲山鳥居観音案内図



至飯能35分

名栗

秋葉山

面白岩

→  
観音滝

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目傘四阿

本堂

壇輪形四阿

梅月橋

梅院之臺

鳥居文庫

名栗川

